

広島県立歴史博物館

# 研究紀要

第24号



今中丹後「御中老格控」からみる広島藩重職の書状贈答料紙	石川良枝	1
闘茶について—闘茶札と文献資料から探るその具体像—	石橋健太郎	24
資料紹介—塩竈神社奉納額について—	伊藤大輔	51
「菅茶山」の姓名・号について—茶山・晋師・太中—	岡野将士	59
吉川興経の引退と毛利元春の家督相続	木村信幸	67
研究ノート 文化年間初頭に地方に伝わった北方図について～「松前えそ図」と 「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～	久下実	85
「山陽先生詩稿」訳注(一)	花本哲志	99
広島県立歴史博物館所蔵の雲華上人の書簡—翻刻と解題— ..... 湯谷祐三 廣森美枝子		121
<hr/>		
福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址出土遺物について	尾崎光伸	(1)

**BULLETIN**  
**Of**  
**the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY**

**Vol.24**

**2021**

Artifacts Excavated from the Ruins of the Abandoned Wako-ji Temple Pagoda in  
Tsunogo-cho, Fukuyama City ..... OZAKI Mitsunobu (1)

---

Mapping papers used in formal correspondence, traced from Onchūrōkaku-hikae .....	ISHIKAWA Yoshie	1
“Toucha” —Search of the concrete image to begin with a tea competition cards— .....	ISHIBASHI Kentarou	24
About “SIOGAMA shrine exvoto” .....	ITOU Daisuke	51
About the name of “KAN Chazan” and pen name—Chazan Tokinori and Tachu— .....	OKONO Masashi	59
About the inheritance of Kikkawa family by “MOURI Motoharu” and the retirement of “KIKKAWA Okitsune” .....	KIMURA Nobuyuki	67
Two maps of HOKKAIDO spread to local area in Japan in early BUNKA-period (approximately 1804–1808) .....	KUGE Minoru	85
Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part1 .....	HANAMOTO Satoshi	99
The letters of Priest Unge in the collection of the Hiroshima Prefectural Museum of History .....	YUTANI Yuuzou, HIROMORI Mieko	121

# 資料紹介 — 塩竈神社奉納額について —

伊藤 大輔

はじめに

令和元年(二〇一九)に、当館へ寄贈いただいた資料の一つに「塩竈神社奉納額」がある。本稿では、この「塩竈神社奉納額」の内容を精査し、若干の考察を行う。

本資料は奉納俳諧を収録した扁額で材質は木製、寸法はタテ五一・〇センチメートル×ヨコ一九〇・五センチメートルである。内容として、俳諧が三十六句、その下に詠み人、詠み人の在所であろう地名が刻まれる。末尾には「追加」として、「六合老人」の俳諧が別に一句載せられ、清書を行った人物の名も見える。また「天明三年(一七八三)」の「立春吉旦」に奉納されたものである。

## 1 「塩竈神社奉納額」の翻刻

早速ではあるが、奉納額の翻刻を左に掲示する。また句の区切りに「/」を付している。なお、木に彫られたものでもあり、所々判読が困難な箇所も存在した。そのため、判読不能の場所は□で表した。ご寛恕いただきたい。

奉納俳諧発句集

とれ取て/捨る山なし/初霞	今治	喜梅
鹿鳴や/布子に添し/母の文	天女ハマ	子光
二三寸/水を覆ふ/柳かな	ミタラヒ	鳳洲
大竹の/三節陰ある/暑かな	天女ハマ	斜木
おとなしき/雲のあゆみや/小望月	同所	徐風
梅咲や/香のある雪と/ない雪と	今治	不染
鶯に/一声寒き/知らず哉	同所	南里
あけたてハ/風のする戸や/かんこ鳥	千ハマ	晩翠
うくいすの/竹を離るゝ/二月哉	今治	嵐丈
初厂や/筏の上の/さをの下	千ハマ	斜木
帰る宿は/細きけふりや/鈍たゝき		里梅
物おもふ/娘の形や/萩の花		晩翠
吹ぬ日も/焚ほとハちる/木の葉哉	讃州	琴柳
風蘭も/目をさませとや/一柄杓		徐風
虫のこゑ/枕のたらぬ/下屋敷	今治	琴秋
水底に/居るを答や/さくら鯛	□□	可笑
待恋と/人にはいひて/ほとゝきす		鳳洲
橋掛る/芸の細工や/花すゝき		斜木

蕨喰ふて／寝た夜半もあり／艸枕 生れなから／秋知る花や／葉鶏頭 鳥飛んで／水を離るゝ／柳かな 出た跡で／何を案する／わらひ哉 名月や／障子に生つた／梯もあり むつかしき／折目もなくて／團哉 一羽二羽／空渡りても／千鳥かな 川船や／柳の縁を／漕て行 うつくしき／脛もよこれて／汐干哉 一寝入り／しても昼なり／藤のはな うくいすや／頭の覗く／明り先 野も山も／丸めて見たり／今朝の雪 涼しさや／庵は青田を／取広げ 奥の間は／橋伝ひ也／かきつはた かもひ間に／つらむや鹿の／袋角 竹の子や／笠に着て出る／古草履 人や住む／常ハたつ戸に／枇杷の花 白藤や／風にもつるゝ／神子の袖	讃州 天女ハマ 干ハマ セト田 吉和ハマ ヨカウ 竹原 干ハマ 天女ハマ	緩秀 徐風 琴秋 梅女 章嶋 徐風 崎女 厂齒 周女 烏竹 厂齒 里梅 青玉 徐風 柳嶋 晚翠 几由 厂齒
--	--	--

追加 撰宗芸陽

六合老人

すゝ風も

頭れ出し  
御祓哉  
生全舎 斜木  
浙江亭 徐風  
天明三年  
癸卯立春吉旦

## 2 奉納された神社について

奉納額の来歴であるが、寄贈者から伺った情報としては、かつて向島の肥浜にあった塩竈神社に奉納されたものであるとされる。現在、当該の地区には干浜神社（肥浜明神）という社殿跡が残っており、塩竈神社とはこの神社のことと思われる。

なお「神社明細帳<sup>(1)</sup>」によると、干浜神社の祭神は、綿津見神・塩椎翁神とされる。特に塩椎翁神は塩竈明神とも言われ、全国各地の塩竈神社の祭神として祀られている存在である。

また、干浜神社の由緒は、元禄三年（一六九〇）に橋本次郎右衛門が創立したと伝えられる。橋本次郎右衛門とは、尾道の豪商である橋本家（屋号灰屋）の老家（東灰屋）の当主のことであろう。なお、干浜には、神社ができる前年、すなわち元禄二年（一六八九）に、石井保兵衛、灰屋治良右衛門、同甚七、同七兵衛らによって塩田が開発されている<sup>(2)</sup>。この灰屋治良右衛門は、橋本次郎右衛門のことと考えられ、干浜神社は、

周囲の塩田も含め、橋本家とのつながりが深かったことを指摘しておきたい。

### 3 奉納額に見られる地名について

次に奉納額に見られる具体的な地名を見ていこう。奉納額には「今治」「天女ハマ」「ミタラヒ」「干ハマ」「讃州」「セト田」「吉和ハマ」「竹原」などの地名が確認できるが、この内「干ハマ(干浜・肥浜)」「天女ハマ(天女浜)」「は向島に存在していた塩浜である。その他、向島の近隣の地名として、尾道の「吉和ハマ(吉和浜)」、生口島の「セト田(瀬戸田)」、その他「竹原」、大崎下島の「ミタラヒ(御手洗)」<sup>(4)</sup>、芸備地方以外だと「今治」や「讃州」が見える。

これらは、いずれも瀬戸内地域の沿岸部、島嶼部の地名であり、塩田による塩生産や輸送に関わる地域が多く含まれている。

芸備地方の入浜式塩田については、慶安三年(一六五〇)に開発された竹原塩田をはじめとして、その後著しく発展している。例えば、向島の「干浜(肥浜)」は元禄二年(一六八九)、「天女浜」は元禄五年(一六九二)に開発されている。「吉和浜」も三次藩領時代の元禄九年(一六九六)から正徳五年(一七一五)に<sup>(5)</sup>、「瀬戸田」にも生口古浜が寛文十年(一六七〇)から天和三年(一六八三)の間に形成されている<sup>(4)</sup>。

「御手洗」「瀬戸田」「竹原」については、港としての機能も注目さ

れる。これらは廻船の寄港地または塩の積出港として栄えており、塩の流通・輸送という点においても重要な地域であった。

芸備地方以外の地名について、「今治」の近辺には元禄十三年(一七〇〇)に開発された大島の津倉塩田、松山藩領ではあるが、天和三年(一六八三)に開発された波止浜などがある<sup>(5)</sup>。「讃州」も宝暦五年(一七五五)に開発された亥浜などの塩田を擁しており<sup>(6)</sup>、「塩竈神社奉納額」に見られる地名は、多くが塩田による塩生産やその輸送に関わる地域であった。

### 4 奉納額に見られる人名について

「塩竈神社奉納額」には俳諧を詠んだ人々の名前として、「喜梅」「子光」など計二十四名の名が記されるが、管見の限り、「追加」の俳諧を詠んだ「六合老人」以外に詳細が分かる人物はいなかった<sup>(7)</sup>。

それでは「追加」の俳諧を詠んだ「六合老人」とはどのような人物であったのか。

下垣内和人氏の『芸備俳諧史の研究』<sup>(8)</sup>や『広島県史』によると、六合は、俗称を茶屋喜三郎といい、近世期の広島俳壇の中心であった多賀庵の二代庵主のことであるとす。彼は初代庵主風律<sup>(9)</sup>の門人で、天明元年(一七八二)の風律没後、多賀庵の跡を継いだ。寛政六年(一七九四)には『瓠苗集』を刊行、寛政九年(一七九七)に風律の十七年忌追善を行うなど、当時の広島俳壇の中心人物の一人であった。

六合は、俳諧師以外にも孝行者として名が残っている。広島藩が刊行

した『芸備孝義伝初編<sup>(10)</sup>』には、「十日市町喜三郎」として収録されており、老いた母への孝行によつて、天明七年（一七八七）に褒賞を受けたことが示される<sup>(11)</sup>。

また、六合は『芸備孝義伝』の編纂者の一人で広島藩儒の頼春水や神辺出身の儒学者・漢詩人の菅茶山が残した記録にもその名が見える。

頼家と多賀庵は、初代風律の時代から交流があった。例えば、安永六年（一七七七）二月十日付の頼春水書簡には「風律より早春柿ト香茸ヲ贈り来候、殊外見事ニ候、それゆへ士徳へハ両方まぜて遣候、子琴へも少々遣候<sup>(12)</sup>」、安永七年閏七月十二日付の書簡では「廣府ニてハ風律へ参候迄也、廣府ハ人ノラチノアカヌ所ヂヤト申居候<sup>(13)</sup>」などの記載が見られる。

六合の代になつても、多賀庵と頼家の関係は続いていた。風律は天明元年（一七八一）四月に没するが、同年八月十八日の春水の書簡を見ると「此頃風律の庵の碑銘此方へ相談有之事ニ候<sup>(14)</sup>」とあり、多賀庵のシンボルであった多賀庵の木碑について、春水に相談があった事が分かる<sup>(15)</sup>。春水に相談を行った人物は示されていないが、多賀庵を継いだ六合の可能性が高いと思われる。

春水が広島藩儒に登用された後も、多賀庵や六合に関わる記述を見ることが出来る。その例として『春水日記』の天明二年（一七八二）三月五日には「雨天。休日。多賀亭へ行く、八桂・子華・六合・美秀・今春・源二・寿杖・世並屋・堅良来会、頗風趣ありき<sup>(16)</sup>」という記述があり、春水は多賀庵を訪ね、六合や林堅良<sup>(17)</sup>などの人物と交流を行っていることが分かる。

六合は神辺の儒学者である菅茶山の残した日記の中にも登場している。天明八年（一七八八）に茶山が広島旅行を行った際の日記『芸遊日記』の六月廿日条には「千祺来戒移具水楼以開別筵、会俳師六合者至、余嘗聞其名、因介館主人見之、千祺乃去、六合以純孝蒙賞賜事在今春、為人質樸不似尋常賈人、談話少時辞去<sup>(18)</sup>」（千祺来りて、具を水楼に移して、以て別筵を開かんことを戒ぐ、会ま俳師六合なる者至る、余、嘗て其名を聞く、因つて館の主人を介して之を見る、千祺は乃ち去る、六合は純孝を以て賞賜を蒙る、事は今春に在り、為人質樸にして、尋常の賈人に似ず、談話少時にして辞去す）」とあり、広島の水楼で「千祺」、すなわち春水の弟である頼杏坪と会っている時に、茶山は六合と出会う機会があり、談話をしていることが分かる。

ここまで「六合老人」についてごく簡単に触れてきたが、彼は広島島の俳壇の中心であった多賀庵の二代目庵主であった。また、茶山が「為人質樸」と述べているように、母への孝行によつて藩から褒賞を受けていた人物でもあった。また頼春水など広島の人々ともつながりを持っており、当時の芸備地方の俳諧の中心人物として活動した人物であったといえよう。

## おわりに

ここまで「塩竈神社奉納額」を巡り、奉納された神社、額に刻まれた地名、人名について検討してきた。すなわち「塩竈神社奉納額」は、元禄三年（一六九〇）に橋本次郎右衛門によって創建された干浜神社に奉納されたものであり、額に刻まれた地名は、多くが塩田による塩生産やその輸送に関わる地域であった。また「追加」の俳諧を詠んだ「六合老人」は広島俳壇の中心であった多賀庵の二代目庵主であり、当時の芸備地方の俳諧の中心人物として活動した人物であった。

最後に、「塩竈神社奉納額」と尾道の豪商である橋本家との関係を考察したい。前述したように奉納額が納められたと考えられる干浜神社は、当時の橋本家宗家の当主橋本次郎右衛門の創建によるものであった。額が奉納された天明三年（一七八三）時点での境内の土地所有者については、資料的な裏付けがとれないが、「神社明細帳」が作成された明治初年の時点では、分家（加登灰屋）の当主橋本吉兵衛の外、二十名の共有となっており、また干浜神社境内内にあった恵比寿神社は天保三年（一八三二）に橋本渡助によって創建されたと伝えられていることから、奉納額の形成に橋本家が何らかの形で関わっていたことは十分考えられる<sup>(19)</sup>。この点については、今後の研究の進展を待ちたい。

本稿では「塩竈神社奉納額」のみの検討に留まったが、今後、各地に残る俳諧の奉納額の調査が進むことで、その性質や人物などのより詳しい情報、知見を得ることが可能となると思われる。本稿が今後の調査研究の一助になれば幸いである。

## 【注】

- 1 「西八幡神社文書」所収（広島県立文書館複製資料にて閲覧可）。
- 2 向島町史編さん委員会編『向島町史』（向島町 二〇〇〇）
- 3 前掲注2書
- 4 広島県編『広島県史 近世1』（広島県 一九八一）
- 5 内田九州男・川岡勉・矢野達夫・寺内浩『愛媛県の歴史』（山川出版社 二〇一〇）
- 6 木原溥幸・田中健二・丹羽佑一・和田仁『香川県の歴史』（山川出版社 一九九七）
- 7 今治の「不染」「南里」について、同一人物であるかは不明であるが、重信町文化財専門委員会編『重信の俳諧資料』（重信町教育委員会 一九七九）所収の拝志神社額（文化六年（一八〇九）奉納）翻刻の中に同じ号が見える。
- 8 下垣内和人『芸備俳諧師の研究』（赤尾照文堂 一九七四）
- 9 広島県の俳諧の中心人物。元禄十一年（一六九八）、広島塩屋町に生まれた。木地（木製の塗物）を家業とし、隠居後は松尾芭蕉の弟子であった志太野坡（しだやば）に俳諧を学んだ。彼が開いた多賀庵は、廣瀬村油池（現在の広島市広瀬町）にあったとされ、そこに建てられた陸奥国多賀城の「壺のいしぶみ」に模した船板の碑にちなみ、その名がついたという。風律は天明元年（一七八一）に没するが、彼の死後も多賀庵は以降の広島俳諧の中心となり、明治まで続いた。
- 10 広島藩から褒賞を受けた領内の孝子奇特者二二〇人の略伝を載せたもの。頼春水・頼杏坪が編纂、岡岷山が挿絵を描き、寛政九年（一七九七）に脱稿、

- 享和元年（一八〇一）に刊行された。
- 11 「喜三郎ハ六合りくくわうとよまれて俳諧の師なり、かぎりなき母おもひのものにて、はいかいの筵にゆきても帰れハ、かならずくだ物をふところにせり、母、寺にまうで、或ハ日くれ、或ハ雨ふりなどすれバ、句うめき居けるもやがてあんじさして、むかへにまかり、背負てぞ帰りける、母手足しびれければ、常にいだきかゝへ、食物もミなどゝろみてくハしむ、母いたく老ほけて、寝ぬればそとはかとなくたは言いへるに、その度々起ていらへすることまめなりし時とそ、うけせるがごとし、天明七年七月十日、しろかねたまはりて、その孝をほうせらる」（『芸備孝義伝初編』巻一「十日市町喜三郎」）
- 12 「安永六年二月十日付頼春水書簡」（頼祺一『近世後期朱子学派の研究』〔溪水社 一九八六〕所収）
- 13 「安永七年閏七月十二日付頼春水書状」（頼祺一『近世後期朱子学派の研究』〔溪水社 一九八六〕所収）
- 14 「天明元年八月十八日付頼春水書状」（頼祺一『近世後期朱子学派の研究』〔溪水社 一九八六〕所収）
- 15 多賀庵の木碑は春水の揮毫によって、寛政十一年（一七九九）六月下旬に改建される。なお、六合没後の文化四年（一八〇七）四月には、腐朽のため石碑へと改められている。
- 16 頼山陽先生遺蹟顕彰会『頼山陽全書〔附録〕春水日記 梅廳日記』（頼山陽遺蹟顕彰会 一九三二）
- 17 名は義之、字は強卿、栗園と号した。竹原の出身で頼家とは親交があった。
- 18 「芸遊日記」（広島県立歴史博物館所蔵「菅茶山関係資料」内に所収）。
- 19 干浜神社には明治三年（一八七〇）八月に尾道石工喜右衛門によって建てられた石柱があり、それには「灰屋光平」「灰屋久平」の他4名の名前が見えている。なお「灰屋光平」は、慶応二年（一八六六）から明治十二年（一八七九）までの間、肥浜支配人を勤めていた人物である。





写真1 「塩竈神社奉納額」1句目～9句目

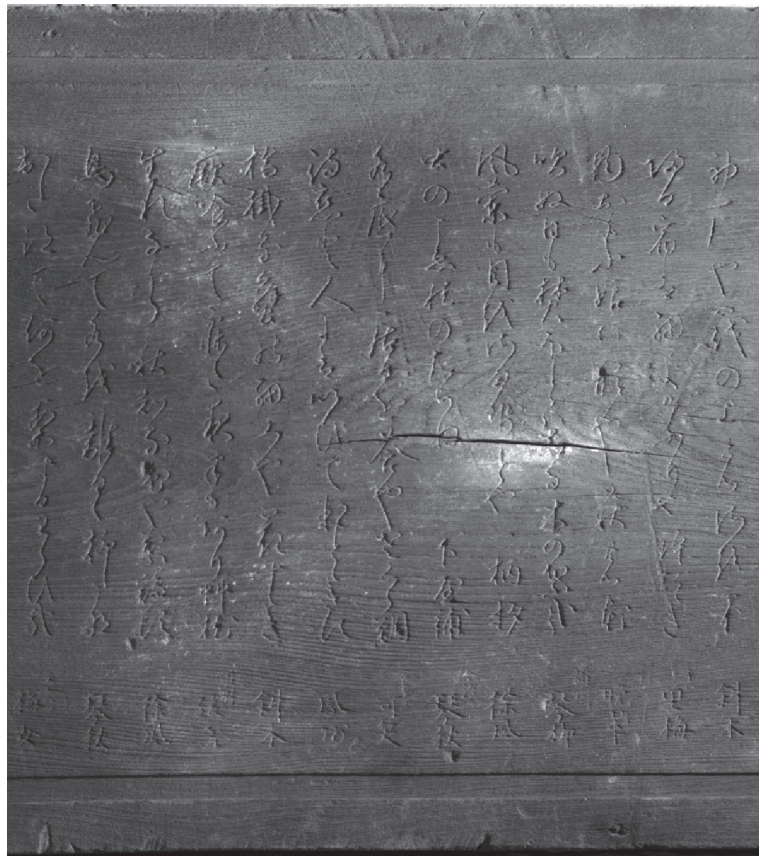


写真2 「塩竈神社奉納額」10句目～22句目



写真3 「塩竈神社奉納額」 23 句目～36 句目



写真4 「塩竈神社奉納額」 追加

執 筆 者

石川 良枝	広島県立文書館文書等整理従事員
石橋健太郎	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
伊藤 大輔	広島県教育委員会事務局管理部文化財課主任
岡野 将士	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
木村 信幸	広島県立歴史博物館学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長
久下 実	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
湯谷 祐三	愛知県立大学非常勤講師
廣森美枝子	小牧市古文書調査会会員
尾崎 光伸	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員

広 島 県 立 歴 史 博 物 館 研 究 紀 要 第 24 号

BULLETIN of the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY Vol.24

発 行 日 令和 3 年 9 月 30 日

編集・発行 広島県立歴史博物館  
Hiroshima Prefectural Museum of History  
〒720-0067 広島県福山市西町 2-4-1  
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima Prefecture  
720-0067, Japan  
Tel.084-931-2513 Fax.084-931-2514

印 刷 株式会社カオス

